

古田 勝一（1986 年 法学部卒）  
参加コース B 宮城県コース

### 「現地を訪問して思うこと」

あの 2011 年 3 月 11 日の東日本大震災の発生から 3 年 7 か月が経ちましたが、その後の復興状況についてはマスコミを通じて報道される情報も次第に少なくなっているように感じていました。できれば自分の目で現地の状況を見て生の声を聴きたいという思いがあり、このたび校友会主催の東北応援ツアーに参加させていただくこととなりました。

現地では、被災された本学校友の方々が復興に向けて真摯にまた情熱的に取り組んでおられる姿に接し、私も胸が熱くなる思いがありました。

石巻市では、校友が再建された「木の屋石巻水産」の魚の冷凍・缶詰工場を見学しお話を伺いました。津波の被害により一度は事業の継続を断念しながらも、従業員を解雇することなくもう一度水産事業を復興したいという情熱に感銘を受けました。また鯨の缶詰を作り続けることで食文化を後世に伝えたいという思いにも共感するものがありました(試食させていただいた鯨ステーキが美味しかったせいもありますが)。

また、名取市のかまぼこ会社「ささ圭」の経営者御夫妻も校友ですが、津波により工場も自宅も流されるという絶望的な状況の中で従業員を守り事業を継続するために力強く立ち上がろうとしておられました。社長さんは誠実な中に秘めた情熱を感じるお人柄で、またそれを支える奥様は優しくも芯の強い感じの印象でした。そして、ご両親や息子さん、従業員の方々も含め一致団結して復興に取り組んでおられる姿は特に印象的でした。手焼きにこだわった笹かまぼこも作っておられ、美味しく試食させていただきました。もちろん、お土産はささ圭の笹かまぼこで決まりです。

女川町では、トラック重機等が行き来しており復興事業の真ただ中にあるという印象でした。山を削ってその土で土地をかき上げするなどして、新しい街をゼロから作り直すという壮大な事業が進行していました。津波に強いまちづくりとしては世界的にも先進的な事例になると思います。ただ、前人未踏の領域だけに、今後も多くの問題が生じるかと思いますが、粘り強く解決し是非成功例となってほしいと感じました。

観光協会の職員さんのお話では、津波の際にいったんは高台に避難したが家族の安否等を確認するために自宅に戻った人が津波に飲み込まれた事例が多かったということでした。津波が来たときは各人が高台に逃げることをあらかじめ家族内で確認徹底しておくことが本当に重要で、あとは家族を信頼しつつ自分の命を守ることを最優先するということが、非情かもしれませんが生き抜くための肝であるということです。職員さんの「災害時は自分の命をまず第一に考えてください」という言葉は重みをもって受け止めました。

今回のツアーでは、復興に向けて真摯に取り組んでおられる校友の方々の姿に接し、月並みな言い方ですが元気をいただきました。被災者の方々を支援するつもりが、むしろ当方が精神的に支援されたような思いです。

私が、被災地のためにお役に立てることがあるとすれば、今回の経験を身近なところから発信し、情報を共有することであると感じています。そして、少しでも多くの方が被災地を訪れる契機となれば良いなと思います。

最後に、このような貴重な機会を与えてくださいました宮城県校友会、震災復興支援実行委員会、校友会事務局の皆様にお礼申し上げます。